

〔発表〕

台北帝国大学から愛知大学へ

東亜同文書院大学記念センター研究員 佃 隆一郎

こんにちは、ただ今ご紹介に預かりました佃です。普段は出身大学でもある愛知大学の、東亜同文書院大学記念センターに詰めておまして、主に愛知大学創設後の歴史に関することを、日本の大学史全体を含めて担当しております。今回は台湾との関連ということで、戦前の台北帝国大学と、戦後まもなく創設された愛知大学との関係について述べてみます。

日本統治時代に設置された台北帝国大学は、日本の敗戦で台湾大学に移行しましたが、戦後まもなく日本国内に新設された愛知大学の源流の一つとされることもありました。

台北帝大と愛知大との関係についての通常認識としましては、やはり敗戦によって、中国上海にあった東亜同文書院大学より引き揚げてきた教職員有志によって創設された愛知大に、台北帝大と、今の韓国ソウルにあった京城帝国大学の引揚げ教員も加わる形で一種の側面強化がなされ、当初入学した学生、旧制の予科・学部生ですが、同文書院大を主体に台北・京城両帝大などを交えた、「外地」からの引揚げ者がその多くを構成したということになりましょう。

ですので、台北帝国大学がそのまま愛知大学に移行したという形ではありませんし、これは京城帝国大はいまでもなく、東亜同文書院大も同様ですが、台北帝大は愛大創設の際、引き合いに出される大学の一つとなっています。ただし、「愛知大学史」の視点では、台北帝国大の具体的な位置づけは、京城帝国大ともどもいまだ曖昧であるといえます。

そこで今回の発表は、まず台北帝国大学の概観を、戦前の台湾での高等教育の一端として述べ

てみます。その上で、愛知大学の創設時に台北帝大から“継承”されたものについて、教員と学生の移籍や(編)入学の面から検討してみることで、ひとつの“愛知大学前史”を描くことにしたいと思います。

本題の前半は「台北帝国大学とは」として、まず台北帝国大の歩みを見てみましょう。

1928(昭和3)年春、文政学部と理農学部の二学部が設置された形で開校した台北帝大は、1886年に公布された帝国大学令と、1922年に制定された台湾教育令に基づいた官立の総合大学として、戦前の台湾唯一の大学でもありました。

当時台湾での大学設立の立脚点として、地理的・気候的・人種的な利点と、日本の南洋への進出の唯一の足場であるという見地から、大学の使命や、学科の構成、それに教授の配置などが考えられたそうです。

昭和10年代にあたります、1930年代後半から40年代前半にかけて、医学部、予科、工学部が増設され、さらに理農学部が理学部と農学部とに分離されたり、研究所が設置されたりしました。

1945年8月に日本が降伏した時の、台北帝国大学の学部構成は、文政学部・理学部・農学部・医学部・工学部でした。その年の11月15日に、進駐してきた中華民国政府に接收されて国立台湾大学と改称したのち、翌1946年2月からの、日本人の教職員や学生の引揚げにともない、台北帝大以来の業務・講義も消滅しましたが、大学自体は現在の台湾大学に引き継がれました。

このように存在した期間としては短かった、台北帝国大学に対する各氏の評価としましては、台湾の最高学府としての南方文化や熱帯医学・農学に

関する研究業績と、台湾大学の発展につながったことがあげられています。その一方で、「政治、思想関係の学問は敬遠」され、「台北帝大は、戦前における台湾の唯一の最高学府であったが、高等学校と大学予科の卒業生が少ないため、競争率は専門学校よりも低いという奇異な現象」があったともされています。

こうしたいろいろな見方を踏まえた上での、台北帝国大学の歴史的特色を、学部生の日本人と台湾人の比率を中心とした研究動向を手がかりにして見てみましょう。

最近日本国内で一般的に相当な支持を得ている“日本の植民地経営肯定論”では、“我が国は満州や朝鮮半島や台湾に生活のインフラを数多く残したほか、学校を多く造り現地人の教育に力を入れた”というものがあまして、その根拠のひとつとして“日本政府は大阪や名古屋よりも先に朝鮮や台湾に帝国大学を造っている”ことを強調している

人もいますが、問題の本質は、“その大学にはどこの誰が学んでいたか”ということでしょう。

次の表のように、台北帝国大学の学部の歴代卒業生は、太平洋戦争中の 1943(昭和 18)年までで 838 名にのぼりましたが、台湾(地元)人と日本人との比率は、医学部以外日本人が圧倒的に多数でした。これは、翌 1944 年の在籍者も同様でして、医学部以外の台湾人学部生数は、日本人の 10 分の 1にも達していませんでした。また教員の構成にしましても、終戦前の統計では 173 人のうち、台湾人はただ 1人だけでした。もっとも、一方で台湾の中等教育では、1938 年以降中等学校に台湾人生徒が増えていきましたが、これはもちろん台湾人に戦争協力を期待したための政策であり、その上の高等教育機関に進学する台湾人は依然限られていたことは、台北帝大以外の高等学校・専門学校のケースを見ても明らかです。

人種	学 部			合計
	文政学部	理農学部	医学部	
台湾人	45 (14%)	37 (11%)	79 (45%)	161 (19%)
日本人	277 (86%)	303 (89%)	97 (55%)	677 (81%)
合計	322 (100%)	340 (100%)	176 (100%)	838 (100%)

1943 年までの学部別・人種別の台北帝国大学学部卒業生総数
 出典:P.G.アルトバック・V.セルバトナム編著、馬越徹・大塚豊監訳
 『アジアの大学—従属から自立へ—』、玉川大学出版部、
 内第 10 章「台湾における高等教育の発展」

こうしたことから、台北帝国大学は「宗主国」日本の政策によって「内地」より優先される形で設立されましたが、同大学のみならず台湾での高等教育のかたち自体が、現地の台湾人のためのものになっていなかったと言えるのでありまして、その意味ですが、台北帝大の設立が比較的早かったことで、“日本は植民地で良いことをした”という証拠にすることは無理があるのではと思います。

台北帝大に限らず、日本によって当時「外地」に設立されていた各高等教育機関は、敗戦で例外なく終焉を迎えることになりましたが、そのまま消滅する形となったもののほかに、日本や現地で大なり

小なり受け継がれた所もありました。ここからのテーマは、現在「愛知大学の実質的前身」と位置づけられている東亜同文書院大学や、愛知大にある程度の教員が移籍した京城帝国大学の場合との比較対照を交えながら、台北帝国大学から愛知大学へ、どのような形でどのようなものが“受け継がれていた”のかを検討してみます。まず愛知大学が創設された過程での、台北帝国大学との関連について見てみましょう。

愛知県豊橋市で愛知大学が創設されたのは、1946(昭和 21)年 11 月 15 日でした。新生愛知大学は、敗戦により廃校となって上海から引き揚げて

きた東亜同文書院大学の教職員有志によって設立されましたが、台北帝大は京城帝国大学とともに、同文書院以外から愛知大学に加入した“ほかの大学の代表的なもの”としての位置づけがなされていることがあるに過ぎないのは、最初にも述べました。

しかし、公式の通史といえます『愛知大学五十年史 通史編』の「前置き」では、愛知大学がその 11 月 15 日に旧制大学としての設立を認可され、当時中部地区唯一の文科系大学として創設されたことを冒頭で述べた上で台北帝大を、京城帝大とともに“愛知大学を形成したもの”の一要素であったとしています。その根拠には、設立に際しての作製文書「愛知大学設立認可申請」内の注記「教員銓衡方針」での一節があります。

ですので、愛知大学の“母体”は、“主”が上海の東亜同文書院大学で、“従”が京城帝国大学と、台北帝国大学であるといえましょう、そうなりますと、実際に愛知大学が形成された時期で、それら三大学がどう関連し合っていたのが重要になってきましょう。

ここで主役となる人が、東亜同文書院大学最後の学長でした本間喜一です。この人は書院大学の廃校と教職員・学生の引揚げに際し、めざましい対応と処置を行なった人です。

敗戦から半年後の 1946 年 3 月 1 日に、本間は同文書院大学関係者の最後の一同とともに帰国しましたが、大学の経営母体でした東亜同文会はその 1 か月前に解散を決定して、占領軍による追放の懸念がない本間ら 4 名をすでに清算人に選任していました。本間は帰国してすぐにその業務に携わる一方で、同文書院を受け継ぐ大学を設立することへの考慮も、清算を指揮していた前理事長代理に申し入れました。これは当時急務になっていた、引揚げ学生の救済のためでした。

しかし代理の回答は、“当局(同窓会)としては行なわれないが、有志でやるのなら異存はない”というものでありまして、それを受けた本間は、元同文書院大教授の小岩井淨(じょう)らとともに、この年の秋を目標とした新大学設立に乗り出すことになりました。

以後、東京の設立仮事務所にも本間喜一はほぼ毎日通い、設立の事務を指揮しました。そこでは、大学を設立するために一番重要で難しい問題であります「教員組織の確定」を促進するために、本間は小岩井と相談しながら、東亜同文書院大と同じく(廃校と接収とで違いますが)“海外にあったが敗戦により引揚げ”になった、京城帝国大や台北帝国大の教員にも注目しました。

まず京城帝国大学の関係では、その元学長の紹介を得た本間は、法文学部長であった大内武次を訪ねて協力を要請しまして、大内はそれに全面的に賛同し、京城帝大の元教員に連絡することを約束してくれました。

そして、台北帝国大学の関係では、本間は東京の霞が関にあったその大学の連絡事務所を訪ね、そこで引揚げ教員の連絡先を示した紙切れを発見して、それを写し取ることで有効に利用しました。

新しい大学をつくるにあたって、本間がこのように広い視野から教員スタッフの充実を考えたのは、東京帝大を卒業して東京商大(現在の一橋大)に勤め、学界にも広い知り合いをもっていたこの人ならではのことで評されています。

また、新大学の設立場所としましては、愛知県出身の元同文書院教員から連絡を受けた横田忍豊橋市長の協力で、豊橋市の南の郊外にあった元陸軍予備士官学校校舎に決まりまして、11 月 15 日、新大学は“所在地に「知を愛する」という意味もこめた”「愛知大学」として、(やはり本間と旧知の仲でありました)田中耕太郎文部大臣より認可されました。

こうしていち早く開校を果たした愛知大学でしたが、功労者の本間喜一自身は戦争中に同文書院大学生をたくさん戦地に送った責任を感じるとして、学長になることを固く辞退しました。代わって本間は小岩井や大内とともに、元慶応義塾大塾長と東亜同文会理事でした林毅陸(きろく)をお願いして、初代学長に招きました。

翌 1947(昭和 22)年、愛知大学は 1 月に最初の予科生が、5 月に最初の学部生が、それぞれ 3 つの期間に分かれたコースに入学したことで、豊橋

の地に全国と海外からの教員と学生を迎えてスタートしました。

ただ、本間喜一の考慮と尽力にもかかわらず、実際に愛知大学が創立した時に台北帝国大から移籍した教員は、財政学担当の小幡(おぼた)清金教授1名のみでした。もともと、創立3か月前の8月に田中文字部大臣へ提出された、先の設立認可申請書では、ほかにも哲学の担当教員として「元台北帝大教授 柳田謙十郎予定」とありますが、この人の着任は実現しませんでした。そういうことで、愛知大学教員として登用しようとした教員のうち台北帝国大学関係者の占める割合は、幻に終わった柳田氏を含めても、全体の4パーセントに過ぎませんでした。

しかし、創立2周年にあたった1948(昭和23)年11月までには、行政法の園部敏、教育学の伊藤猷典、民法の西村信雄の3名が加わりまして、台北帝大出身の教員は、小さいながらも一つのグループになりました。このころには、国内・海外双方の各大学・専門学校・機関から旧制愛知大学への教員の“転入”が出揃いました。

その中で、小幡清金教授について見てみますと、この人は1898(明治31)年に東京で生まれ、1923(大正12)年に当時の東京帝国大学経済学部を卒業しました。台北帝国大学の教員になった時期は未確認ですが、東京帝大卒業後ほどなく赴任したとすれば、台北帝大の創設期から教鞭をとっていたこととなります。新学制の実施にともない、愛知大学が1948(昭和23)年7月に改めて文部大臣に提出した設置認可申請書の中にあります「総長並びに学部及び学科別教員予定」では、小幡は新制大学で財政学のほかに貨幣金融論の担当も予定されていて、これまでの著書は6点、学術論文は10点以上を数えるとあります(設立された新制学部では実際に、上記以外の科目も担当)。

また小幡は役職として、愛知大学の図書館長も務めまして、のちには理事にも就任しました。こうした小幡が愛知大学の中で“台北帝大系”としての存在感を示したことは、十分に想像が可能なことだと思います。

次に、台北帝国大学生の愛知大学への転入学

について見てみますと、こちらも愛知大への京城と台北の両帝大出身者については実際のところ、1947年の旧制予科・学部各コースの全入学者901名の中で京城3名、台北10名と、さほど多くありません。その一方で、東亜同文書院大学の出身者(予科・学部および付属専門部)は200名以上にも及びまして、ほかにも、新京法政大学や(東亜同文会が委嘱経営していた)北京経済専門学校といった、旧満州を含めた中国大陸の各学校の出身者が目立っています。

その“10名の台北帝大出身者”の内訳を、次の表で掲示してみます。これはすべて予科の出身者(在学していた人と修了した人とに分かれている)が愛知大予科に入学した形でありまして、同学部に直接入学した人は、予科・学部いずれの出身者ともゼロでした。なお、同じ1947年に台湾のほかの学校から愛知大学予科・学部に入学者の集計も、予科8名、学部2名と多くはありませんで、途中で退学した人は4割を占めました。また、いずれの集団も、台湾の現地人は台北高等商業から愛大経済学部に入学者のもの、中退した1名のみで終わりました。

話を小幡教授に戻しますと、台北帝国大学の予科で講義を担当していたかについては不明でして、この予科が創設された時のカリキュラムで経済関係の科目は少なく、経済の専任講師が別に着任していました。このことから、愛知大学に再・編入学した元台北帝大の予科生が、“小幡先生を慕って”そうしたとは考えにくいのですが、台北帝大からの予科生の大部分が愛大法経学部経済科にそのまま進学した傾向は、台湾のほかの高等教育機関からの予科生に比べても顕著でありますことから、旧制の経済科では、“元台北組”が少数ながらも小幡ゼミのもとで、確かに固まっていた可能性はあるのではないのでしょうか。

ここでまとめを述べましょう。台北帝国大学は植民地に早期に設立された官立帝国大学でありました一方、植民地の大学であるがゆえの“限界”も持ち合わせていました。しかし、短い生涯を終えた台北帝大の“遺産”は、施設や研究成果の面で台湾大学に継承されましたし、豊橋に生まれた愛知大

旧制予科(学部は該当者なし)

入学年月 及び期間	出身地	生年月日	学 歴	備 考
1947.1~3	大分県	1928.1.1	台北三中→台北帝大予科在学→	1950.3 経済卒
	広島市	1925.10.21	台南一中→台北帝大予科在学→	1950.3 学部卒
	岐阜県	1925.6.1	台北一中→台北帝大予科在学→	
1947.1~48.3	長崎市	1926.3.31	瓊浦中→台北帝大予科1年修了→	1951.3 経済卒
	長崎→福岡	1927.10.1	台北四中→台北帝大予科在学→	
	東京都	1927.6.1	台北一中→ 台北帝大予科1年修了→	1951.3 経済卒
	静岡県	1926.7.28	嘉義中→台北帝大予科在学→	1951.3 経済卒
	鹿児島県	1925.7.23	?→台北帝大予科在学→	1951.3 経済卒
1947.1~49.3	熊本県	1928.1.5	高雄一中→ 台北帝大予科1年修了→	1952.3 経済卒
1947.1~?	鹿児島県	1929.1.17	台北四中→台北帝大予科在学→	中途退学

創設期の愛知大学に入学した、台北帝国大学をはじめとする台湾の学校の出身者
(1947年入学分。省略した氏名のアイウエオ順に各期で記載)
出典:愛知大学豊橋学生課保管の学籍簿より筆者が作製した一覧表

学にも限定的な形ですが、教職員と予科生の個人的な移籍・転入学でもたらされることになりました。

ただし、旧東亜同文書院大学の場合は、本間喜一元学長らが書院再建、愛大創設の指揮を自らとり、消滅した時の同文書院大の学生・生徒の専攻が、旧制法経学部の法政科と経済科と予科の形で、開校した愛知大学と比較的合致していたことから、教員・学生ともまとまった形で愛知大に移行できたとと言えます。それに対して、台北帝国大学と京城帝国大学の場合は、学部の構成で理科系・医科系に比重が置かれたことから、台北帝大は教員の移籍が、京城帝大は学生の移籍が、結果として進まなかったと考えられます。

それでも、台北帝国大学予科から愛知大学予科に転入学してきた各生徒は、集団としては少数でしたが、元台北帝大の小幡教授のいた、愛大法経学部の経済科に相当数が進学したのでありまして、愛知大学経済学部が豊橋から、この笹島新キャンパスに全面移転した今、わずかながらも存在した台北帝国大学の命脈が、この地に生きつづけていくことに期待したいと思います。

以上、これにて発表を終らせていただきます。あ

りがとうございました。

藤田 どうもありがとうございました。愛知大学と台北帝国大学との関わりということでしたが、それでは続きまして、黄美娥先生にコメントをお願いします。

黄 先生の論文にコメントをさせていただきまして光栄です。そして自分が、台湾大学の教授として、愛知大学との深い関わりは、今日まではわかりませんでした。そして今日は、この新しい校舎を訪れて、台湾大学との絆を確かめました。

この論題は「愛知大学の前史」と、発表者の佃さんものはっきりとおっしゃっていました。

私は歴史研究者ではなくて、あくまで文学の研究者ですので、今日は読者として、この感想を述べたいと思います。

まず一つ目は、今回のシンポジウムは主に台湾の戦後を論じますが、今回の佃先生は、日本での戦後を語ってきました。それは非常に特別な視点だと思います。

そして、この論文は同時に、東亜同文書院大学と台北帝国大学、それから京城帝国大学の校史を

扱っていて、それは研究者として、広範な作業をしていることを物語っています。また、戦争による「非常時」が、大学にもたらした影響を論じています。さらに、愛知大学というケースは、中国に設立されて戦後に再生したのが、大学の歴史としてはとても特別な例だと思います。

愛知大学が中国と日本にとって、元京城帝国大学と台北帝国大学の教師と学生を引き受けること、このような大学の構成は、日本の内地と外地、そして日本の植民地の仕組みの再構築という意味も含んでいます。そして、愛知大学の設立は、日本に新しい教育のコースをもたらしました。

東亜同文書院は、東アジアという視野をとっても重視していました。そして戦後になって、愛知大学はまた、東アジアのいろいろな所から教師や学生を引き受けて、この新しい大学を建てました。そこから戦後の日本の東アジア像を語るのには、とても重要かと思います。

佃先生の研究を通じて私は、愛知大学は日本の教育史上特殊で、将来も研究する価値があることがわかりました。私の知る限り、台湾大学の歴史研究について、戦後に台湾大学の教員や学生が集団的にほかの大学に編入されて影響力を發揮したことは、これまで着目されていませんでした。ですのでこの研究は、とても啓発的だと思います。

そして二つ目は、以前のイメージとしては、台北帝国大学はあくまで植民地の大学ですので、愛知県の大学とは比べられないというものがありました。戦後には愛知大学の創設ということがありました。戦前と戦後を合わせて考えるにあたっては、新しい視点が出てくると思います。

以上、この論文の特長をあげましたが、私個人の意見を述べます。

一つ目は、「愛知大学設立趣意書」のことで、その中には日本の軍国主義に対する反省、そして世界平和追求への要望について述べられています。その点が研究できるかと思います。

二つ目は、その趣意書の中の、「政治・経済の中心地以外に大学を」というのは、ほかの日本の大学には見られないものでしたので、それを強調すれば、たぶん小幡清金先生の愛知大学での重要

性をもっと浮き彫りになるかと思います。

三つ目は、京城帝国大学からの教員もたくさんいましたので、愛知大学を論じる時には、東亜同文書院と台北帝国大学と、京城帝国大学の三つの面から比較すれば、もっと意義があると思います。そして、元台北帝国大学からの人が、愛知大学での一つの流派や勢力になったかどうかを、もっとはっきりさせる必要があるかと思います。

皆さん、ご清聴ありがとうございました。

藤田 どうもありがとうございました。時間がたちましたけども、最低お一人どなたかおられましたらお願いします。では、はい。簡単にどうぞ。

発言者 ありがとうございます。私が質問したいことは愛知大学ではなく、愛知県全体がそうですが、山下ヤスオ先生が書かれた台北帝大論では、愛知大学ができて、そのあと名古屋大学ができて、うちの中京大では、満鉄調査部出の方とか、朝鮮で裁判所をやった方とかがいて、中国語やロシア語を充実させなければならないというので、先代の理事長というのが、中国との関係を充実させるために、呼んだわけですが、それではなぜ愛知県に、そんなにたくさん引揚者が集まっていたのかってことなんですけど、私はやっぱり愛知県全体の、軍需産業から民需への転換というのが背景にあったと思います。

つまり、(隣県の)四日市には海軍の燃料所がありましたし、豊橋にも海軍の基地がありました。また、愛知万博をやった「海上(かいしよ)の森」は、陸軍の演習場だったんですよ。豊橋には第十五師団がありましたし、愛知県に重化学工業、しかも陸軍中心の重化学工業があったのが、民需に転換する。そのために愛知用水を引きますし、また豊田っていう、軍用車を造っていた会社は、民需のトヨタ自動車会社になりますし、そういう大きな、軍需から民需への流れという背景の中で、学生さんたちも来るとすれば、職がなければならぬのですから、当然どういう職業に就くために、こちらの大学に来るのか。まあ、先生に連れられてきたかもしれませんが、そういった流れの中で、愛知大学だけではなくて、愛知県全体がそういう植民地大学の先生

や学生を引き受けたと思うんですが。

佃 はい、どうもありがとうございます。軍から民へということなんですが、まさしく愛知大学は陸軍の学校だったところにできた大学でありまして、私もそれなりに追究してきたところですが、それでまた海外からの引揚者受入れという面からも考察するという事は、今回新しい発見となりました。先ほどの黄先生のアドバイスも生かしながら、追究していきたいと存じます。

黄先生には愛知大学と私の発表に対しまして、おほめの言葉を下さいまして、本当にありがとうございました。

藤田 はい、ありがとうございました。参考までに言いますと愛知大学は、台北帝大や京城帝大からもありましたものの、学生諸君の動きを見ますと、もちろん東亜同文書院からの在学者が一番多かったのですが、また外地からの引揚げ元は約 80 校に及びまして、まさに“引揚総合大学”のような形で、書院を中心にしてできました。

また、先ほどの(質問者の)浅井先生のお話ですが、愛知県が復興してくるのは昭和 25(1950)年以降で、朝鮮動乱が起きてからですから、まだそれまでには時間があったのですね。とくに 80 校愛知大学に入ってこられたというのは、最初の1年間はこの大学にも入れたのですが、混乱してしまいました。そこで文部省が「外地から来る方々は愛知大へ」という誘導政策を当時とったのですね。そういうことも背景にあるのではないかと思います。

午前中の部は、最初の馬場先生の発表から熱が入りましたが、以上で終わることいたします。

